

## 国際アーサー王学会日本支部 2022年第36回年次大会発表要旨

### 研究発表

#### モルガーヌからマドワーヌへ —『クラリスとラリス』における妖精像—

渡邊浩司（中央大学）

アーサー王の異父姉妹にあたる妖精モルガーヌは、13世紀に古フランス語散文で書かれた物語群（『ランスロ本伝』、『アーサー王の死』、『続メルラン物語』など）の中では、「妖女」としての側面が強調されている。こうした悪しき属性を受け継ぐ妖精が、1270年頃の作と推測される『クラリスとラリス』に登場するマドワーヌである。

『クラリスとラリス』は8音節詩句で3万行以上を数える作者不詳の物語で、2人の若者が唯一無二の親友となり、試練の果てにアーサー王の知遇を得て、それぞれ意中の女性と結婚する。2つの婚姻物語からなる『クラリスとラリス』に前半から登場し、ラリスに対して一方的な恋愛感情を抱くのが妖精マドワーヌである。

本発表では、長編物語『クラリスとラリス』の前半から後半にかけて、外見とその性格の点で劇的な変貌を遂げる妖精マドワーヌ像を検討する。

### シンポジウム

#### 宮廷騎士文学の遊戯性の諸相

##### —恋愛奉仕のパロディー化を中心に—

本シンポジウムでは、13世紀以降のパロディー的な文学作品を扱う。1200年前後の古典的な作品とそれから時代の下ったパロディー的作品の描写の比較によって、社交的な遊戯としての恋愛の描写の変化を考察する。

古典的なテキストの中に描かれる人物たちは、宮廷社会のコードを共有して社会的な役割を演じるという意味で遊戯の参加者であり、その作品を受容する者たちも、同時代の社会の実相が作品化された世界に自己を投影して楽しんだと考えられる。恋愛奉仕の描写はその代表的な例であるのだが、そこには貴婦人を称賛する聖化と共に、その肉体に目を向ける俗化の両方が含まれている。それは遊戯の中でこそ調和しうるものである。遊戯はよそ者を排除しつつ仲間意識を高める文化的な行動であり、常に新たな流行を取り込んで更新されてゆく。

1200年前後には貴婦人の存在を神聖視する婦人奉仕の遊戯が宮廷を支配していたが、数十年たつと、作品を受容する場の変化に応じてその内実は大きく変容していく。以下の5発表ではその諸例として、財産や身分を守るシステムとしての恋愛、より肉感的な恋愛遊戯、論議を呼ぶ人物像のパロディー化と再解釈、農民や醜さの描写を通じた宮廷文化のパロディー化などについて報告する。

### 1. 『ヴィガロイス』における女性像—古典期のアーサー王作品とその後継作品の比較

松原文 (立教大学)

『ヴィガロイス』(～1220年)はフランス語の原典を持たず、いわゆる古典期のドイツ語のアーサー王作品の要素を継承する後継的作品である。長く模倣作品として低く評価されたが、今世紀に入って注目が集まっている。本発表ではミネを通して庇護者を得ようと実利的な戦略をもつ新しい女性像と、恋人の死を嘆く伝統的な女性像の混交を検討する。

### 2. Tagelied のパロディーに見られる作者性—Wolfram 以降のミネザングを中心に—

伊藤亮平 (松山大学)

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは、叙事詩の他に5篇の「ターゲリート」(後朝の歌)を残している。ヴォルフラム以降も様々なバリエーションのターゲリートが作られており、ターゲリートは作者性を発揮しやすいジャンルであったのではないかと思われる。本発表では特にヴォルフラム以降のパロディー的なターゲリートを中心に、抒情歌人の作者性を検討したい。

### 3. パストゥレルにおける人間性と動物性

高名康文 (成城大学)

南仏と北仏のパストゥレル(田園詩)では、奥方への愛を歌う宮廷風の叙情詩に恋愛奉仕の表現を叙情詩に借りながら、そこでは決して語られない欲望が、女羊飼いを対象として歌われている。そこには『狐物語』と同様の、文明と野生の対立と、どちらが文明でどちらが野生かという遊戯が見られる。そのような視点からいくつかの作品を分析する。

### 4. 『ニーベルングンの歌』から『ヴォルムスの薔薇園』へ

—クリエムヒルト像の変遷について—

渡邊徳明 (日本大学)

『ニーベルングンの歌』の中で若きクリエムヒルトは騎士の奉仕の対象ともなる。その彼女が『ヴォルムスの薔薇園』ではわがままな王女としてパロディー化される。松原氏の第一発表で提起される貴婦人の「打算」の問題が、クリエムヒルト描写でも焦点となる。

### 5. ヴィッテンヴィーラー『指輪』における農民と騎士

嶋崎啓 (東北大学)

ハインリヒ・ヴィッテンヴィーラーの叙事詩『指輪』Der Ring (15世紀初頭)は求婚のための騎馬試合、結婚式、式場での喧嘩、喧嘩を原因とする村と村の戦争、村の破滅を描くが、登場人物は農民であり、宮廷騎士文学のパロディーである。本発表では、『指輪』の農民と騎士の描写を通して都市の市民に受容された宮廷文化の有り様を考察する。